

巻頭言

教育のグローバル化と言葉の壁

名古屋大学 国際教育交流センター長

長 畑 明 利

国際教育交流センターのホームページには、海外留学を終えて帰国した学生の声を掲載する「先輩の声(報告書)」のページがある(<http://ieec.iee.nagoya-u.ac.jp/ja/abroad/report/index.html>)。留学を検討している在学生在が実際の留学の様子を知るのに有益な情報を提供するものだが、近年の報告書には、現地で撮影された写真も掲載されており、滞在の様子を具体的に知るのに役立っている。SNSの時代、報告書に写真を掲載していない学生も、おそらく留学中に何らかのSNSサービスを利用して、友人や家族たちと連絡を取り合い、写真を共有していたことだろう。

かつて留学は母語の通じない場所へ行くことを意味していたように思うが、現在は事情が変わりつつあるようである。母語環境から一定期間切り離され、外国語で教育を受けることとして了解される留学のイメージはいまも健在だが、グローバル化時代の留学生は、望めば極めて容易に、現地に居ながらにして日本語環境に憩うことができるのである。

もちろん、SNS、あるいはインターネット普及以前の時代でも、留学生が母語環境から完全に遮断されていたわけではない。留学先の日本人学生会に入ったり、同国出身者同士で連絡を取り合うということはあった。しかし、同時に、留学生は周囲から、過度に日本人同士で行動していると外国語の習得がおぼつかない、関西出身の留学生といつも一緒にいて、留学が終わると大阪弁が上手になって帰国するというのでは留学の意味がないだろう、といったアドバイス(?)もしばしば耳にしたものである。

一方、留学は必ずしも母語の通じない環境に身を置くことのみを意味するわけではない。たとえば、英語を母語とするアメリカ人の学生がイギリスなど英語圏の国の大学で学ぶことも留学に他ならない。留学をたんに「海外で学ぶこと」(study abroad)と捉えれば、母語で学ぶ留学もありうるわけである。近年は、欧米の大学が中国やアラブ首長国連邦など、海外に自校のキャン

パスを作り、現地の学生を受け入れるとともに、自校の学生を現地へ送るという試みを展開しているという話も聞く。学生は現地の言葉や文化も学ぶが、ある程度母語の通じる環境で「留学」を経験することができるのである。

もちろん、こうした言葉の壁を低くした留学プログラムの恩恵を受けるのは主として英語圏の学生である。非英語圏出身の多くの学生にとって、英語という外国語の壁は依然として存在する。しかし、英語を母語としない学生もまた、英語の運用能力を獲得することで、非英語圏の留学先で、現地の言葉を習得することなく教育を受けることができる。そして、いまや各国の大学がこうした留学生を受け入れるべく、英語による教育プログラムを整備している。名古屋大学の「短期日本語プログラム」(NUPACE)などもその一例であるが、これらのプログラムでは、留学先で現地の言葉や文化を学ぶ際にも、英語という国際共通語の通じる環境でその学習を行うことができる。たとえ母語が通じないとしても、一定レベルの英語環境が用意されていることで、非英語圏への留学のハードルが下がるのである。

世界の多くの大学が英語のプログラムを用意して、学生の海外留学を促進している。そしてその制度を、英語母語話者だけでなく、英語非母語話者も利用している。国際共通語としての英語の習得という条件付きではあるが、それは、留学における言葉の壁を低くする試みとして了解することができる。国際共通語としての英語については様々な意見があるが、英語を介しての留学は、英語とは異なる言語の習得や、英語圏とは異なる国の文化や社会を深く知ることもつながる。異文化理解のためには、現地の言葉を習得し、その言語を用いて、現地の文化に触れる直接的な経験を得ることが依然として重要であるが、英語で運営される教育プログラムへの留学は、そのための最初の一步を提供する役割も果たしている。日本人学生にも参加してもらえればと思う。